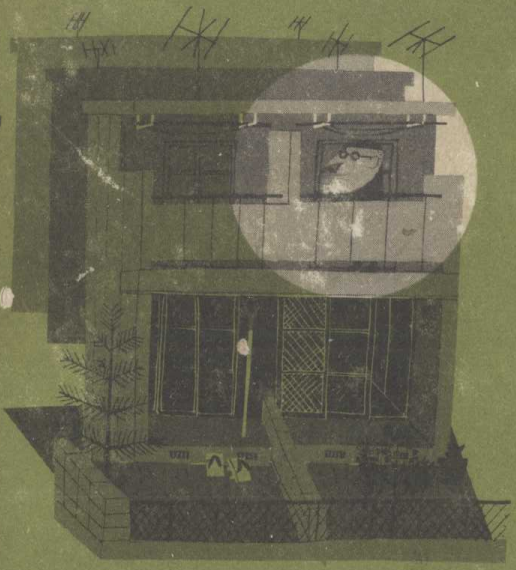
# 江分利満氏の優雅な生活

山口瞳



# 江分利満氏の優雅な生活

山口瞳

文藝春秋新社

# 江分利満氏の優雅な生活

<著者略歴>大正15年11月東京生れ。早大中退。小出版社を転々。昭和33年洋酒の寿屋入社。宣伝部制作課勤務。コピーライター。『洋酒天国』編集同人。　川崎市木月大町83

昭和38年2月15日発行
定価320円

著者　山口瞳
発行者　小野詮造
発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西8の4

印刷　図書印刷
製本　加藤製本

© 1963 Hitomi Yamaguchi　Printed in Japan

しぶい結婚……5
おもしろい？……23
マンハント……41
困ってしまう……57
おふくろのうた……75
ステレオがやってきた……93
いろいろ有難う……111
東と西……135
カーテンの売れる街……157
これからどうなる……173
昭和の日本人……189
＊
江分利満の元日……220
ドッカリ夫人を愛す……225
悲暑地のできごと……235

装幀　柳原良平

題字　伊丹一三

撮影　田沼武能

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 江分利満氏の優雅な生活

# しぶい結婚

## ■ SNUB-NOSE. 38

砂利の多い道を少年が駈けてゆく。日曜日の午後1時を少し廻ったところである。

道の端の砂利の少いところをえらんで、思いつめたような顔で駈けてゆく。左掌の10円玉は、汗でビッショリ濡れて匂っている。1軒の店に着いたとき、そのままの顔付きをくずさずに少年は深呼吸して、棚から棚をゆっくりと見廻す。2度、3度。やがて1冊の本をつまらなそうに取りあげてパラパラとめくり、ややぞんざいにもとへ戻す。呼吸は平常に復したが、憂鬱が少年を領している。しかし、ふたたび書棚に目をあげたとき、少年の顔はパッと輝く。誰だってその時の少年の顔を美しいと思わぬ者はない。心を静めて1冊を抜きとり「コレ」と小さくいって10円玉を渡す。少年はふたたび、砂利道の砂利をえらんで駈けだす。少年が胸にかかえているのは、武藤勝之介著『長編宇宙漫画・金星人の逆襲』である。

彼は、モダンなテラス・ハウス群に消えるが、ほぼ30分経った頃ふたたび姿をあらわす。左掌に10円玉、右手に武藤勝之介、母親に注意されたのか今度はストロー・ハットをかぶっている。

貸本屋のオヤジというのは、何故怠け者が多いのだろうか？　営業時間は午後1時から9時までで

ある。朝は仕入れに行くのか。それとも文化人を自任しているのだろうか？

貸本の値段は、翌日の9時までに返済すれば1冊10円、以後1日増すごとに5円増しとなる。

たいていの日曜日、少年は、貸本屋とテラス・ハウスを10往復するが、支払いは必ずしも百円ではない。2度ぐらいはマケてくれるからである。それにしても、少年は何故1冊借りて10円払い、それを返して、また1冊借りて10円払うという手間のかかる方法をとるのだろうか？　翌日の午後9時に返しても料金は変らないし、5冊いっぺんに借りることだってできるのに。少年は気が弱いのだろうか、それとも潔癖なのだろうか？

少年は学校から帰ると、道で拾った硬式テニス・ボールを持って外へ出る。彼はそれを毛毬と称しているが、1人でテラス・ハウス東側の壁にぶつけるのである。少年の球はかなり速くて母親は受けることができない。少年は慎重にかまえ、ワインド・アップし、快速球を投げこむのである。彼はときに捕手のサインに首をふることがある。プレートをはずし、1塁ランナーをにらみ、口の中でブツブツいいながら、次の球質を考えることがある。彼のタネモノは「変化球」とフォーク・ボールと「沈む球」であるが、彼自身がそう思っているだけで全て速球である。もっとも彼は快速球も怪速球だと信じている。テラス・ハウスの壁は粗くて、怪速球はとんでもない方向にはねかえるが、彼は決して走らずにゆうゆうと拾いにゆく。ピッチャーは走ってはいけないと教えられたのだ。それをあきずにくりかえすのである。

不思議なことに、少年は野球はキライである。プロ野球の選手は長嶋と王しか知らないし、テレビ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の野球がはじまると、2階の自分の部屋に消える。彼ははじめ小学校の野球部の選手であったが、1ト月たたないうちに2軍の首将を命ぜられた。2軍の何かを知らず、主将について知っていたから、得意であったが、そのうち2軍は試合に出られないと知って止めてしまった。

少年の忍懣が壁野球になった。彼は何かを呟き、1球ずつ丹念にあきずに投げこむのである。いい忘れたが、彼は珍しい左投げ右打ちである。左投げ右打ちで名選手が出たためしがない。

少年はしばらくコルトに凝ったことがある。食事中も手離さず、夜も抱いて寝たが、1年経って小遣いをためて SNUB-NOSE 38 を買った。私立探偵（プライベート・ディテクティブ）のつもりである。「サンセット77」というテレビ映画をご存知のかたはすぐ分るはずと思うが、上着の下に仕込むピストルである。

彼は様々にスナップ・ノーズを発音してみた。勉強中にもときどき「スナップ・ノーズ！」という気取った声が聞かれた。

「スナップ・ノーズ？」

そのうち、ノーズは鼻であることに気がついた。次に苦心さんたん、1時間かかって遂に辞書の中から SNUB-NOSE という単語を見つけだした。SNUB-NOSE は「獅子鼻」であることが分った。彼の独りごとに日本訳が加わることになる。「スナップ・ノーズ！　獅子の鼻」彼は静かにピストルをなでるのである。獅子の鼻！　ますます勇ましいではないか。愛着は深まるようであった。

少年の母は、息子が英語の辞書をひいたことに感動した。

「どれどれ、どこに出てたの？」
少年は辞書の頁を示した。
「SNUB-NOSE。名詞ね。獅子鼻。ホント！」
「シシッパナ？　獅子の鼻じゃないの？」
「ライオンの鼻じゃないのよ、ホラ、あんたみたいに天井むいてる鼻のことを獅子鼻っていうのよ。そういえばこのピストルもそんな感じね」
少年の落胆は独り言をいわなくなったことで知れた。
この少年が、江分利満の1人息子江分利庄助（10歳）である。

■堀

実際、砂利の多い道である。道路工事をはじめるために砂利を敷いたのか、それとも単に砂利を置いたのか分らぬが、胼胝のある江分利の歩き方は自然に老人のようになる。背を曲げ、下を向き、具合のよさそうな石を拾って歩かねばならぬ。
砂利は、その他にも実害をおよぼした。江分利の勤めている東西電機の社宅12軒のうち、江分利家と他の3軒が道路に面していた。
ある日、隣に住む営業1課の辺根がいうには、昨夜寝ているときに拳大の石が飛んできてガラス戸を破ったという。幸い網戸と2重になっていたので大事に至らなかったが「寝ていて交通事故に会うんやから、かないまへんわ」と辺根がいうのは、その石が、トラックだかミキサー車だかのタイヤで

はじき飛ばされたものだったからである。

そういえば、江分利も、夜中、トラックが通るときにカチリという音を聞くことがあった。はね飛ばされた砂利が、金網の塀に当る音である。江分利家の庭は一面の芝であるが、彼が日曜の朝、雑草を抜いているときに意外に大きな石を発見することもあった。彼は丹念に除草し、毎週芝を刈り、小石を捨てるから、新しく発見された石はやはりトラックだかミキサー車だかの仕業に違いない。

江分利にひとつのアイディアが浮かんだ。いまの天地1メートルの金網を2倍にしよう、そうすれば砂利の被害をかなり防げる。これはちょっとしたアイディアではないか？

2世帯で1棟のテラス・ハウスが6棟、計12世帯がこの地域での東西電機の社宅である。2階建てで下が4畳半に台所・風呂・水洗WC、上が6畳に3畳という間取りは全部同じであるが、1棟だけに限っていえば、2世帯は左右対称の間取りとなる。江分利と反対の間取りに住む佐藤夫人は「お宅へ遊びにいくと、身体がこうねじれるような気持ちになりますの」と言う。

さて、建て方は6棟とも同じであるが、矩形でない地所に矩形の家が建ったから、当然、庭に大小ができたのである。ここに面白い現象が生じた。クジ引きで入居したのであるが、大きな庭に当った者は、こころなしか庭の手入れに熱心となり、小さな庭では雑草の茂るがままという状況が見られた。もっともそこは個人の志向もあり、芝を植えると転勤になるというジンクスもあり、転勤の多い営業部とそうでない者とでは自ら愛着に差異が生ずるのだが……

江分利の家は前列、向って右端にあり、菱形の地所の張り出した部分に当るのでもっとも庭が広く、一番小さな家の庭に比較すると、ほぼ1坪広かった。彼はなんとなくいい気持ちであった。いや非常にいい気持ちであった。この気持は社宅住まい、アパート住まいを知らない人には、おそらく理解できないであろう。自分の家が隣の家より、ちょっと広い、庭がちょっと広いというのは、断然いい気持なのである。

江分利は庭つくりに精出した。庭つくりといっても一面の芝生と、ヒマラヤ杉と、道路に面した金網に蔓バラをからませることだけだったが……

彼は、朝早く目覚めたときは、庭へ出て雑草を抜く。日曜日の午前中はこれで潰す。芝の間のどんな小さな雑草をも見逃さない。煙草のすいがら、マッチの軸、小石、粘土のかたまり、枯葉を除く。やや病的に近いが、もともと庭が狭いのだから微視的になるのも致し方がない。

石塀で仕切った隣家の辺根と顔があうことがある。辺根はだまって自分の庭に目を落とす。可憐な、あるいは強靱な、あるいは逞ましい、つまりいかにも雑草らしい雑草が無秩序に生い茂っている。モダンなテラス・ハウスだけに、いっそう痛ましい感がある。目が合っても、何もしゃべらない。これが社宅のエチケットである。しゃべっても、せいぜい

「精が出ますな」

とか

「公園みたいになりましたな」

とか言う程度である。

「昨日の桑田の満塁ホーマー見ましたか？」
「見た見た」
これでおしまいである。

今年の4月、珍しく辺根が鍬を振っているのを見た。2週間ほど経って、芽が出そろった。庭の好きな江分利はうっかり禁を破ってしまった。
「出ましたね、キレイですね」
江分利は自分の庭が美しすぎるのに負目を感じていた。
「コスモスじゃないですか？」
辺根は黙っていた。
「コスモスはいいですよ。つきはなす貨車コスモスのあたりまで、正一郎という人の句だそうですが、コスモスとかカンナとか月見草なんてのは、なんとなく田舎の駅の感じですね」江分利は辺根が汽車好きなのを知っていた。
「旅情がありますよ、それに……」
辺根が低くさえぎった。
「コスモスじゃありませんよ……二十日大根です」
だから、社宅では口をきいてはいけないのである。
ことわっておくが辺根に羞恥も自嘲も怒りもない。明かるく淡々としてこだわらない。ドライであ

る。恥じたのは江分利の方だ。

江分利の、金網を2倍にしようというアイディアには、別の狙いがあった。蔓バラを、そこまでからませたいと思ったのだ。むろん、悪意ではない。危害予防と美観を兼ねたいと願っただけだ。いや、蔓バラの黄と赤とピンクを一杯に咲かせたい、その間からヒマラヤ杉とデッキ・チェアを置いた芝生が見える、というのは江分利が子供の頃から抱きつづけた、無意識のしかし強い願望だったのかも知れない。

金網を危害予防のために2倍にするとすれば、道路に面した、江分利・辺根・川村・佐藤の4軒が結託しなければならぬ。

一番の被害者であり、事務に堪能な辺根が「社宅補修願」を書いた。

①某月某日、拳大の石が飛んできて、辺根家の1階のガラス戸を破りました。さいわい怪我はありませんでしたが、これでは安心して寝ることもできません。

②某月某日ほか数日にわたって江分利家の庭に小石が飛びこみました。川村・佐藤の両家にも同様の被害がありました。これでは安心して庭へ出ることもできません。

③佐藤家には1歳の幼児がいますので、特に危険です。

④現在の金網は道路から簡単にまたぎ越すことができるので、用心が悪い。

⑤従って現在の金網の塀を即刻2倍の高さにしてほしい。

みんなこれに印鑑を押した。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com